

曾於文藝

俳句

末吉俳句会

下萌を踏んで一苑巡るなり

池田 安起徒

いさぎよき愛てる美学や落椿

小野 明日香

連翹や風の煌めきさんざめく

原口 サエ子

大隅俳句会

水温む廻る水車の音高し

穎娃 晴美

朧月心安らぐ今宵かな

川崎 綾子

耳澄まし梵鐘数ふ夕朧

河南 ミホ



桜 (弥五郎伝説の里)

短歌

末吉山茶花短歌会

飴色の獅大根は温かく絆しみじみ味わう夕飯

福宿 みち子

冬日中重機の音のひびかいて里田の道路の拡張すすむ

松崎 さち江

揺れて噴く海から山から起こりくる災害予測の報道過熱

秋本 教子

大隅短歌会

咲かんとする枝垂れ梅を背景に五才のひ孫とベイゴマ競う

本田 澄江

ふるさとの母の遺品をみつけたりまち針打たれしままの反物

西山 美代子

何時よりかひとひらふたひら風花の舞いをり貴女の髪に背に

川辺 玉枝

「題字」

末吉文化協会会員

瀬戸口 淳 氏

財部短歌会

無口にて墨絵ぼかしの杉木立ただ立ち尽くし極寒しのぐ

祝迫 道雄

風強き朝の柚子の実落つるなりひとつ又ひとつ小枝を揺らし

児玉 次雄

警報音鳴らして砂利トラバツクせり即座に築く小石の山を

杉村 リカ

我が見たき名所の旅をすべて終へ心静かに老境へ入る

橋口 貞男

庭先の梅はいよいよつぼみ持つ冷たき風に真向き凛たり

富山 治雄

雪止みて寒月鋭き洛北のみち錫杖の音高く尼僧の列行く

山城 忠

「津波情報」聞けば幼な日の国語の本「稲叢の火」の偉大なる庄屋

瀬戸口 芳子

前向きな話にすると言ひながらつい愚痴が出て苦笑ひする

川俣 若

憂きことも辛きことをも黙しつつ終りし蜘蛛に思いはつる

井上 澄子

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

四時限目 耳ぬ引かれた眠い太郎

森山 厚香

耳も遠え 五体も悪りどん

口ちや達者 古川 一幹

小め耳に なま大てリング

娘が洒落 桐野 奈世

補聴器を 差込っ本腰し 爺を叱るっ

鈴木 一泉

大隅薩摩狂句会

可哀相しどん たまにや叱つとも 魂入れ

太良木 五徳

津波跡 一年経とが

可哀相し様子 新屋 涼子

駄々見い おてちき吸えち 婆ん乳房

津留 群志

子が合格つ おてつき苛め 遭そな脛

神宮司 素水